

日時 : 6月29日(土) 15:50~17:10
会場 : 3階 303・304
開催形式 : ミニレクチャーとグループワーク
配信方法 : Zoom ミーディング

座長

廣瀬 英生 県北西部地域医療センター国保白鳥病院 病院長

演者

後藤 貴宏 市立恵那病院 内科総合診療
伊左次 悟 県北西部地域医療センター国保白鳥病院 副院長兼地域連携室長
阪 哲彰 高山市国民健康保険久々野診療所 所長
／南高山地域医療センター センター長

概要

総合診療医の活躍の場はいくつもあると考えられる。
今回は、診療所での総合診療医、病院での総合診療医、県内のプログラムにて総合診療医
を取得した実例を挙げ、参加者のキャリアパスに関する悩み、課題を拾い上げ、共有して
いく。

座長：廣瀬英生（県北西部地域医療センター国保白鳥病院 病院長）

私の総合診療医研修

後藤 貴宏

市立恵那病院 内科総合診療

新専門医制度が2018年4月から開始された。この制度では各専門医プログラムに登録し、それを履修することが必要となった。一方、自治医科大学卒業生としての義務年限内の勤務は、岐阜県職員としての人事であり、個人の希望だけで動くことはできなかった。そのため両者をふまえてキャリアプランを考えることにした。

岐阜県内では総合診療医プログラムが複数あった。その中で義務年限内に取得できうるプログラムに候補を絞り、恵那病院のプログラムに登録した。このプログラムは4年制のプログラムで、総合診療研修で必要となる診療所、病院研修は義務年限内に派遣されうる場所であった。しかし、義務年限内の派遣は初期研修2年、地域勤務5年、後期研修2年が通例となっており、専門医研修に必要な内科等の研修が8年目、9年目になってしまった。そのため現在もプログラムは履修中で、プログラム責任者と協議の上、専門医機構には履修期間延長として扱っていただいている。

具体的には総合診療Ⅱとして病院総合診療領域を飛騨市民病院で1年間おこなった。その後、総合診療Ⅰとして下呂市立小坂診療所での研修を4年間行っている。この4年間では診療所所長や併設老健の所長を経験した。4年間継続して勤務することで、医学的なこと以外にも行政との連携、学校医、医師会とのかかわりなど多くの学びがあった。

私は専門医プログラムを最短で履修することはできず、現在も専門医を取得することはできていない。しかし、長期間地域で勤務することで得られることもあった。これらについて発表し、現在の岐阜県での状況を考察したい。

【略歴】

- 2016年 自治医科大学医学部卒業（岐阜県39期生）
- 2016年 岐阜県総合医療センター 初期研修
- 2018年 国民健康保険 飛騨市民病院 総合診療
- 2019年 下呂市立小坂診療所
- 2021年 下呂市立小坂診療所 所長
- 2023年 市立恵那病院 内科総合診療

座長：廣瀬英生（県北西部地域医療センター国保白鳥病院 病院長）

チームや仕組みで生きる総合診療医

伊左次 悟

県北西部地域医療センター 国保白鳥病院 副院長兼地域連携室長

へき地診療所の多い岐阜県の卒業生として、自治医大とへき地医療のこれまでとこれからの分岐点のような時期に義務年限を通過し総合診療という仕事をしてきた。

卒後 3 年目でへき地医師 1 人診療所勤務が当たり前の時代に、まさに研修医を終えてすぐ白川村の医師 1 人診療所に赴任した。多くが親の世代の職員の中で所長となり、手探りの診療と仕事を開始した。週 1 の研修先すら知らない県外の病院を指定された。地域に溶け込み、今でいう振り返りやポートフォリオ学習、遠方の診療所指導医を定期訪問、村内外での新たな連携構築とあらゆる資源活用など、自分ができる範囲見える範囲で精一杯取り組み続けた。

赴任中に高速道路が開通しアクセスが改善して医療の様相も変わった。アクセスに加え周辺の医療機関の様々な事情やタイミング、なにより現在の上司たちの強力なリーダーシップもあり、たまたま県北西部地域医療センターへと巻き込まれるように加わった。それは白川村で 10 年経て限界を感じながらも長く続けてきてやめるのもどうかという折だった。

県北西部地域医療センターは基幹の白鳥病院と 2 市 1 村の複数のへき地診療所が相互に支援して成り立つ仕組みである。白川村に赴任のままセンターに加わり、2 年目に基幹の白鳥病院へ異動した。診療所、病院、地域と様々な場で仕事の幅が広がった。自身も年休や十分な休暇がとれ代診の心配がなくなった。ゆるい 24 時間拘束がなくなり On-Off が明瞭になった。皆が同じ医療をすることで自信が増し患者側の受け止めも良くなった。センター内外で刺激を受ける機会も増え、どの場も複数の眼でオープンな環境になった。なにより相談や振り返りが日常で気楽にできるようになった。医師の交代や教育まで含めた継続性が一定担保されるようになった。

振り返って医師 1 人診療所勤務は精一杯やったがやはり限界があった。今は時間外の各自の負担が減り、必ずしもへき地に住まなくて通勤も可能になり、研修や学会は比較的自由に行くことができ、必要な休みは割と気楽にとれる。そのための調整役も一部担うようになった。自分が苦勞したことを次の世代にさせない役割をすることは時に違和感もあるが、それが世の中の進歩に少しでも貢献することなのかもしれない。キャリアとして総合診療医についても一人で気張って考えるより、チームやシステムの中でやりながら考えていくのがはるかに自然で楽な気がしている。

【略歴】

- 2003 年 自治医科大学卒業（岐阜県 26 期）
- 2003 年 県立岐阜病院（現 岐阜県総合医療センター）
- 2005 年 白川村国保白川診療所・平瀬診療所
- 2015 年 県北西部地域医療センター白川村国民健康保険白川診療所・平瀬診療所
- 2016 年 県北西部地域医療センター国保白鳥病院

座長：廣瀬英生（県北西部地域医療センター国保白鳥病院 病院長）

診療所の総合診療医 ～ 他科専攻医→総合診療医とキャリアチェンジした立場からも ～

阪 哲彰

高山市国民健康保険久々野診療所 所長/南高山地域医療センター センター長

診療所での総合診療医とその働き方についてお話をしようご依頼を頂いた。

しかし私自身はライフイベントの中で他科専攻医からキャリアチェンジを経て今の形に落ち着いた身であり、お恥ずかしながら他の先生に比して総合診療医としての矜持を余り持っていない…というのが現状である。

良いように捉えれば、診療所での総合診療医とその働き方に加え、専攻医からキャリアチェンジした身としての総合診療医の立場や、大学職員・病院勤務医など様々な規模の医療機関での勤務を経験した立場として、診療所での勤務・総合診療医についての魅力をお話していただくことが強みになるのかもしれないと考えている。

本演題では前半に私が現在勤務している岐阜県高山市の国保診療所での働き方や岐阜県飛騨地域の現状・国保としての取り組みや行政に関わる一員としての取り組みをお示ししていくことで、診療所勤務・総合診療医についての魅力をお話する。また後半では専攻医からキャリアチェンジした身としての総合診療医の立場や、大学職員・病院勤務医など様々な規模の医療機関での勤務を経験した立場の上での診療所勤務・総合診療医についての個人的な見解について述べていく予定である。

あくまで一経験例とはなるが、上記項目についてお話することで若手の先生方が自分の長所・短所・ライフイベントを鑑みた上で一番輝ける・幸せに働ける環境を選択できる一助になれば幸いであると考えている。

【略歴】

- 2012年 自治医科大学医学部医学科 卒業（岐阜 35期）
- 2012年 高山赤十字病院 初期研修医
- 2014年 岐阜県立下呂温泉病院 総合内科
- 2015年 東白川村国保診療所 内科（岐阜市民病院 血液内科 非常勤職員）
- 2017年 高山市国民健康保険久々野診療所 所長（岐阜市民病院 血液内科 非常勤職員）
- 2019年 自治医科大学附属病院 血液科 臨床助教
- 2021年 高山市国民健康保険清見診療所 所長
- 2022年 高山市国民健康保険清見診療所 所長
（いろは在宅ケアクリニック・ひだ在宅クリニック 非常勤職員）
- 2023年 南高山地域医療センター長 兼 高山市国民健康保険朝日診療所 所長
（いろは在宅ケアクリニック・ひだ在宅クリニック 非常勤職員）
- 2024年 南高山地域医療センター長 兼 高山市国民健康保険久々野診療所 所長
（いろは在宅ケアクリニック・ひだ在宅クリニック 非常勤職員）